

「桜の園」

西荻窪の「こけし屋」といえば、包装紙などに描かれている西洋人形のような女性像を思い浮かべる人も多いのではないのでしょうか。その絵の作者は、陽気で詩的な作風で知られる洋画家の鈴木信太郎。戦前の荻窪には多くの画家が住んでいましたが、鈴木もその一人で、荻窪駅から近い白山神社の境内に引っ越してきたのは、昭和5年のことでした。

「私はその頃八王子の市内のまん中に住んでいたから郊外のしんとした森の中の風景には格別心を惹かれたのであつた」と、随筆「荻窪近辺」に書いています。八王子より荻窪に自然が多く残っていたとはちょっと意外な感じがしますが、引っ越した家は「森の中の一軒家で、見渡す限り雑木林」だったといいます。

鈴木は、ガラス屋根から陽の光が降り注ぐアトリエを建て、モデル相手に制作に励げみます。しかし、そんなある日、「コツンコツンと木を伐つてはたおす音」が窓の外から聞こえてきました。「ガラス戸を締め切つたアトリエの中でその木の倒れる音だけを聞いていると、裸のモデルさんが立つたポーズのままで“まるで『桜の園』のようね”と云った。そう云えばその斧の音は丁度チエ

ホフの舞台の幕切れのようで、ますますはげしくなつて入り乱れてくるのであつた。そのために千本近い大小の木々が倒されてしまい、しばらく見ない間にそこらの風景は一変してしまつた」

昭和初期の荻窪の宅地化を語る貴重な証言ですが、おそらく築地小劇場で小山内薫演出の「桜の園」を観たのであろうインテリのモデルさんに、学資を稼ぐためにモデルをしていた歌手の淡谷のり子を連想したり、ひとつの時代の空気も伝えてくれます。

「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男

